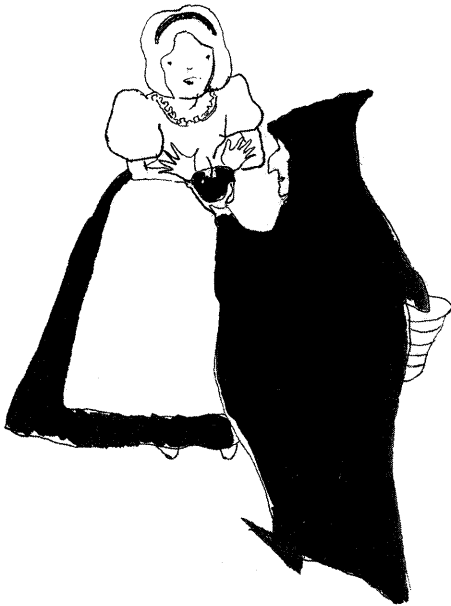


## あるインコの話

——ペットじゃない、友達なんだ——こんなフレーズのCMがあったように記憶している。また折から夏休みのシーズンとあって、犬やらラッコやらぎつねやらの動物映画が盛んに上映されている。一体、人間と動物の関係、つながりというものは何なのだろうか。動物の心を少しでもわかることができるのだろうか。そして友達になれるのだろうか。

私が、あるインコに出会ったのは、今から六年以上も前、高校二年の夏休みの終わり頃だった。その頃私はいろいろと辛いことがあって、自殺願望が募り、日に日に



桜井敬子

自分の心が閉じていくのを感じていた。危機感が高まり、何か自分の心を慰めてくれるものはないだろうかと思っていたとき、母がそんな私の心を知ってか知らずか、小鳥でも飼ったらどうかと私に奨めてくれたのが、「カー」との出会いのきっかけとなった。

ペットショップでは、生まれて間もないインコたちが、小さな箱に入れられてひしめきあっていた。皆が弱くて、ぶるぶると震えているように見えたものだ。その中で、少し大きめの、ひととき美しいヒナ、それが「カー」だった。「カー」は、七色に光るマリンプルーの羽と、黒くてまるい瞳を持っていた。

その日から、私と「カー」の生活が始まることになったのだが、初めは全くの他人だった。小鳥は、ワールド・アニマルと呼ばれ、いくら可愛がっても心が通じあわないと何かの本で読んだことがあったこともあり、特にこのヒナを可愛いとも思わなかった。ただ大きくなったらさぞ美しい鳥になるだろう、それで十分だ、そう思ったものである。事実、二人は全く別の世界を持ってお

り、そこには何の接点もなかったし、「カー」も私も互いに仲良くなりたいとは考えなかった。

それでも、一日三回、ヒナ用にエサを調合し、やわらかく煮て、手ずからエサを食べさせるといふ、インコの子育てが始まった。暑ければ風通しをよくしてやり、涼しければ寒くならないように気を遣い、ヒナがかわがらずにスムーズにエサが食べられるように、優しく話しかけながらゆっくりとエサをやった。この頃から、インコがこちらの表情に敏感に反応するということがわかってきた。イライラしながらえさをやろうとすると、警戒し、時にはかみつこうとするが、猫撫で声で話しかけながらエサをやるときは、とても素直にに応じてくれたものである。それでも依然として、私にとって「カー」は、「愛玩物」の域を出なかつたし、多分「カー」にとても私は単なるエサ運び人にすぎなかつたであろう。しかし、一ヶ月、二ヶ月と経るうちに次第に事情が変わってきた。「カー」の黒い瞳が実は多くの表情を持っていることがわかってきたし、「カー」もまた、私の言

葉に反応し、時には意思表示をするようになったのである。

ある日のことだ。私と「カー」はかなり仲良くなっていたので、「カー」のカゴは二階の私の部屋におかれていたのだが、二人とも一階の居間で長いこと遊んでいた。じゃれたり、菜っぱを食べさせたりしているうちに、人間たちは夕食をすませ、すっかり遅くなってしまう。私は相変わらず、「カー」と遊んでいたが、そのうち飽きてテレビに熱中していると、「カー」がいつになくまとわりついてくる。私のところまで歩いてきて、見上げる。私のことを見つめ、「ちゅん」と鳴く。そんなことが何回かあったのに、愚かな私は、「カー」も随分なついたものだと思えざらでもない。しかし、そのうち「カー」は私のところへ来なくなり、居間の隣りにある台所を通って、まっ暗な廊下を歩いていこうとする。私がつれ戻しても、またその暗い廊下の方へ行き、次に見つけたときは廊下を通りぬけて階段の下まで行き、そこで上を見上げて立っていた。さすがに私も、「ああ、

二階のあんたの部屋に行きたいのね！ お腹が減ってるんだ！」と気づき、「カー」をカゴに入れてやると、ものすごい勢いで、エサを食べだした。

私は、この時「カー」にすまないと思ったことも確かだが、何よりも鳥は鳥目という言葉があるくらいだから、暗い所は苦手な筈なのに、エサにありつきたがために果敢にも長い廊下をわたりきったその意思に驚いた。と同時に、このちっぽけな頭の持ち主が、私の家の構造を見事に把握していたこと、台所を経て廊下を渡り玄関の脇にある階段を上りきれば、自分のカゴに辿りつけるということ、既に理解していた、ということとても感動したのである。この事件で私は、「カー」が一つの「人格」を持っていること、独自の知力と意思力を持っていることを知ることになった。そして、この時以来、私にとって「カー」は、私の意のままになる「愛玩物」ではなくて、独立した意思の持ち主として生きている存在であり、「カー」と友達になりたい、「カー」に仲良くしてもらいたい、と思うようになったのである。

こうして私達は、いつも一緒にいて、互いにじゃれあっているという、かなり親密な関係になった。ピアノをひくと「カー」はすぐ飛んできて、音にあわせて踊った。指でつつくと「カー」は、何とも表現しようのない微妙なリズムでステップした。庭に水を撒くときに外につれて出ても、「カー」は私の傍を離れず、足元でアリの食べたりしていた。お風呂に入るときも一緒に、あるとき誤って湯ぶねに落ちたが、羽をひろげてぶかぶか浮いていたが、その時以来、ときどき自分から湯ぶねに飛びこんできたりした。カゴの戸はいつもあいていたので、「カー」は家の中を自由に飛びまわり、私が勉強している時も、開いているノートの上に飛びおりてきて、よくファンをしたものだ。最早この頃になると、多分「カー」が自分を人間だと思っていたのか、私がインコになっていたか、いずれにせよ私達は殆ど同次元でつきあっていたように思う。

おまけに、私達には共通の言語ができ、言葉でコミュニ

ケーションすることができるようになった。それは、「カー」の発する「カーちゃん」「けーこちゃん」という二つの音声だ。勿論、「カー」が、この二語の意味を理解していたとは思えない。彼女の耳によく入る言葉をただオウム返ししているうちに覚えてしまっただけなのだろう。ただ「カー」がその言葉を、特殊なものとして、自分のさえずりとは別の、何らかの意味を持ったものとして使っていたことは、ほぼ間違いがないように思われる。なぜなら、彼女がこの言葉を使うのは、必ず私に何かを要求する時だったからである。「エサがないよ」「水を変えてよ」といいたいとき、必ず「カー」は、「カーちゃん」「けーこちゃん」と言った。それ以外の何か緊急事態が起きると、「かあちゃああん」「けーこちゃああん」と全く人間が呼ぶように、大きな声で叫ぶ。彼女がただオウム返しでこの言葉を使っていたのではないことは、私が毎朝「カーちゃん（お早う、ご機嫌いかがかか意）」と言うと、必ず「けーこちゃん」（今日も元気よ、あなたは何の意）」と応答したことから明らかだ。も

「けーちゃん」と言うこと「かーちゃん」と言うこと、二つの言葉が二人の名前だなんてことは全く考えもしなかったということも確かだろう。

私にとってはとても幸福な日々だった。私の心は大いに慰められ、もっと「かー」と仲良くなりたいたい、本当の会話がしたい、と心から願った。しかし、私の心にはいくつかのわだかまりがあった。私にとって「かー」が最早なくてはならない存在であることは、自他共に認めるところであったし、「かー」は、私の子供であり、友達であり、お姉さんのようでもあった。だが、「かー」にとって私は何なのだろうか、エサ運び人にすぎないのか、それとも彼女を支配する主人でしかないのか、そんな思いが私を悩ませた。なぜなら、もし私が彼女を「支配」している者であるなら、支配者と被支配者の間に、本当の会話が成りたつはずがないからだ。支配者がいくら「愛している」と思っただとしても、それは強い立場にある者が、か弱い者を慰みものにしてにすぎない。

生殺与奪の権限を握られてしまった被支配者が、どうして自由な心で、心から湧きでる愛情で支配者を愛することができようか。

その頃、「キャリア・ウーマン」という言葉が流行りだした時期で、学校でも「経済的自立なくして精神的自立がありうるか」「妻が経済的に自立していなくても、夫と対等の関係を保てるか」などということが、よく話題になっていた。そんなこともあって、私は真剣に悩んだ。しかし、人間の存在は観念的なものではない。生活のよすがを他人に依存する者がその人におもねることなく、心を自由に持てる筈はないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その日から路頭に迷うしかない妻に精神的自立などあり得る筈がないではないか。ましてや、互いに深く愛しあうなど、できよう筈がない。強い者は弱い者を可愛いがり、弱い者はそれを甘んじて受けるしかない、それが道理というものだ。

私は、「かー」をお金で買い、エサをやって「かー」と暮らしているということが、とても嫌だった。私もイ

ンコになってしまいたかった。自分が客観的には「カー」を支配しているという事実、従って「カー」は客観的には私の「愛玩物」にすぎない、という事実を認められなかった。この想い、ひきめは決して消えることはなく、「カー」が死ぬときにも、「カー」が死んで三年近くたった今でもなお持ち続けている。

時々、「カー」は窓ぎわに立って、外を見ていることがあった。そんな「カー」の後ろ姿を見ると、私は心が痛んだ。「いくら家の中を自由に飛び廻れるということも、所詮は大きなカゴに閉じこめられていることに変わりはない。カーは、本心では、大空に飛んでいきたいのかも知れない。或いは自由な空があることすら知らないのかもしれない。それは全て私のせいだ。」そんな風に考えてしまった。多分、本当にその人を愛しているなら、その人が十分にその人らしく生きられるように、あらゆる可能性を認めて助けることができる筈だ。それを家にとじこめておくのは、心の狭い証拠、私のエゴだと思つた。「カー」を閉じこめておいて平気なのは、心

のどこかで、「カー」を自分の所有物だと思つていながらであり、本当には愛していない、愛する力量が自分にはないのだと思われた。愛することに条件をつけることはできない。妻が家にいる限りで愛そうとする夫も、夫が自分を養ってくれる限りで愛そうとする妻も、結局は本当にはお互いを愛しているとはいえないということと同じだと思わずにいられなかった。

ただ、この問題は「カー」の気持ちが変わらない以上、性急に私は「カー」を空に放つことはするまいと思つていた。もしかしたら、「カー」は、エサを確保するためにこの家にとどまっているつもりかもしれないからだ。今まで逃げるチャンスはいくらでもあったのに、「カー」がそれをしなかったのは、或いはこの家での生活を、私を気にいってくれているからなのかもしれないと思つたからである。私がつつと「カー」を好きになつて、いつか「カー」の気持ちが変わるようになるまで待つていようと決めた。

私と「カー」の友情はわずか三年半しか続かなかつた。「カー」は私が大学二年生のとき、二日あまりの七転八倒の苦しみの末、二月二十七日、永遠に目を閉じてしまったのである。詳細を記す余裕はないが、レントゲンを診た獣医の話では、鉛（！）をのんだのではないかというのである。寝耳に水とはこのことだ。小鳥用の配合飼料には、ときどきとんでもないものが混入していることがあると言う。

何度この手で殺してあげようと思ったかわからないほどの、見るに耐えない長い苦しみの中で「カー」は何を考えたのだろう。発作のたびに目に見えて体力を失っていく、その哀れなインコは、私の手のひらの上に抱かれながら、ほんの少しでも私のことを思ってくれたらどうか。私達の楽しかった日々が、私の一方的な思い込みであつたとすれば、それは私にとっては耐え難いことだ。

最後の発作がくる直前、「カー」は目を開けた。私は「カーちゃん、あなたにとつて、私は何だったの——」そう聞かすにはいられなかつた。やがて問もなく「か

ー」は目を見張り、緊張し、体をこわばらせた。これで最期だ——私がそう思った瞬間、「カー」の体は、まるで、本当に、雑巾を絞るように斜めにねじれた。「きゅっ」という音がして「カー」の命は、ぶつたり、切れた。最早「カー」は何も言わず、目を閉じて、頭を私の手の上に横たえた。体はもう硬くはなかつた。

(東京大学)